



TITLE:

静脩 Vol. 14 No. 2 (1977.9) [全文]

AUTHOR(S):

CITATION:

静脩 Vol. 14 No. 2 (1977.9) [全文]. 静脩 1977, 14(2)

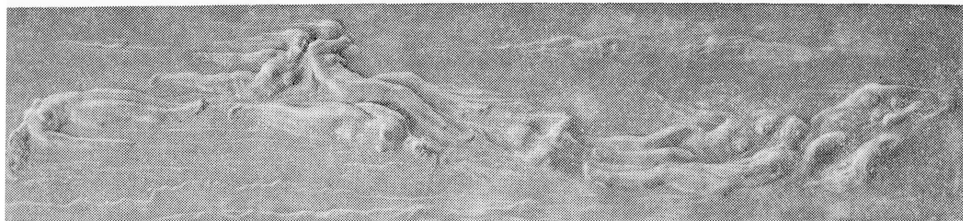
ISSUE DATE:

1977-09

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/65958>

RIGHT:



大学図書館について思うこと

経済学部教授 木 原 正 雄

戦後、建ったばかりの中央館は、近代的で偉容を誇っていたが、現在では、附属図書館の文字がなければ、なんか古びた倉庫（書物の倉庫に違いないが）を思わせるわびしい姿になってしまっている。もっとも中央館としての面目は、図書館職員の方がたの我慢と努力によって保たれてきているが。

「大学図書館改善要項」（第2草案）の冒頭には、大学図書館の使命として、つぎのように書かれている。

「大学図書館は、大学における学術情報利用のための中心的機関として、教育及び研究に必要な学術図書・雑誌その他の記録資料を効率的に収集・整理・蓄積して、学部学生・大学院学生及び教員等による学修、研究・調査のための利用に対し、これを効果的に提供するとともに、その他学術情報の利用の円滑化のために必要な活動を行い、大学の教育・研究に貢献することを基本的使命とする。」

ここに書かれているように、大学における教育・研究にとって、大学図書館が不可欠なものであることはいうまでもない。大学図書館がその基本的使命を果すためには、「教育及び研究に必要な学術図書・雑誌その他の記録資料を効率的に収集・整理・蓄積し」学生教職員の利用に供しうの一貫

した体制が整備されていなければならない。

しかしながら現状はどうであろうか。

戦後の科学・技術の進歩は、多くの新しい学術部門の創設をうながし、出版される図書・雑誌・資料の種類や部数は膨大な量に達している。ところが、このような出版物の増大に反比例して、研究書の不足、図書費等の値上り、従来無料頒布されていたものの有料化などのため、研究者個人では、最少限必要な図書・資料さえ購入できなくなっている。このため、図書館にたいする期待はますます大きくなってきているが、図書館の現状は、必ずしもその要求に応じえているとはいえないであろう。

その最大の原因は、図書館自体の予算が十分でないにもかかわらず、図書・雑誌の値上りのみならず、管理運営費等が年々急速に増大しているため、いきおい図書・資料の購入に犠牲がしわよせされざるをえなくなっていることである。予算の不足、人員の不足は、今日大学図書館が直面しているもっとも大きな問題であり、このまま放置すれば、教育・研究に否定的な影響を及ぼすことにもなりかねないところまできているといえよう。

もちろん、金や人^{カネ}の問題が解決すれば、すべてがうまくいくということではない。図書館自体がかかえている問題もある。さきにもふれたように、

図書・雑誌の種類、出版点数は急増し、研究論文などの学術情報量（年間約400万件の論文が発表されているといわれている）もまた急増している。今後この傾向は、科学・技術の進歩、研究者の増加とともに、一層すすむであろうことが予想される。

また旧来の形態での図書・雑誌・資料などにかわり、マイクロフィルム、マイクロカード、マイクロフィッシュ、磁気テープなど新しい形態の資料が増えてきている。

さらにまた、科学・技術の進歩は、新しい学問領域を生みだし、研究領域の分化、領域間の境界の交錯、自然科学部門内のみならず、自然科学と人文・社会科学部門間の協力をますます必要としてきている。

このような学術研究の領域における諸変化、これにともなう利用者の要求の多様化にたいし、現状のままでは、どこまで対応することができ、図書館としての機能を発揮することができるかという問題がある。旧来の収集・整理の仕方、検索や分類の方法では、多様化した利用者の要求に十分答えきれなくなっている。

コンピューター化や形式的な集中方式だけで、すべて解決するものではないが、自然科学部門のばあい、コンピューターなどの導入により、情報処理と情報伝達の集中化、迅速化をすすめること

が必要となってきた。このような点での立遅れはないであろうか。

京都大学では、部局図書館が中心となり、教育・研究に大きな貢献をしてきたし、この点現在も変りない。しかしながら、図書館が科学・技術の進歩に対応するだけではなく、積極的に科学・技術の発展をうながすうえで貢献するためには、部局図書館の自主性を侵さず、その独自性を尊重しながら、部局図書館の枠内では解決しえない問題を、全学的立場から取上げ、解決するために、中央館の果す役割はまことに大きいものがあるといえよう。また中央館独自の活動分野も拡大している現在、中央館の役割、機能はいかにあるべきかを明確にすることが急務ではないだろうか。

幸い、林館長のもとで図書館の改善について鋭意検討がすすめられている。たんなる検討に終ることなく、せっかく貴重な図書・資料の蓄積をもつ京大図書館が、事態の進展に遅れることなく、その機能を果しうるよう実りある結論が一日も早く出されることを祈るものである。なお、図書館が教育・研究に貢献しうるか否かは、実際に運営にたずさわる職員の方がたに依存することが多い。広く職員の意見を聞くことも運営改善のために不可欠ではなかろうか。最後にこのことを申し添えておきたい。

資料紹介

深作光貞氏旧蔵書寄贈される

深作光貞先生（本学文学部フランス文学出身で現在は京都精華短期大学学長）の御厚意により御蔵書の一部分であるフランス文学中世、ルネサンスの研究資料約70冊の御寄贈を受けたが、そのほとんどが19世紀末から今世紀前半にかけてフランスで出版された非常に得がたい資料である。中でも詩人 Marot, Clément (1496-1544) の全集：Le œuvres de Clément Marot de Cahors en Quercy, valet de chambre du Roy; augmentées

d'un grand nombre de ses compositions nouvelles par cidevant non imprimées, ...[Édition Georges Guiffrey] Paris, [1875-1931] 5 vols. front. (port.) illus. 25 cm. は550部限定出版の内の一部で完全に揃っていて、本学でもはじめて所蔵する貴重なエディションである。このような稀観書を文学部に備えることが出来、この分野の研究成果を期待するとともに寄贈者にあらためて深く感謝する次第である。

アメリカの大学の図書館のことなど

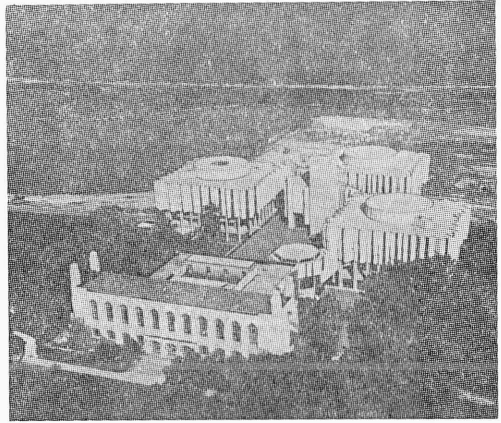
梅 本 実

アメリカの大学図書館について何か書いて欲しいという事で私の経験など2, 3書いてみます。

私は京都大学大学院修士課程に入学した年、つまり昭和46年の秋にアメリカに渡り Illinois 州 Evanston にある Northwestern 大学に1年間在学しその後同じ Illinois 州 Urbana-Champaign にある Illinois 大学で博士課程の学生として4年余り過ごした。

最初に在学した Northwestern 大学はシカゴのすぐ北にあり、Michigan 湖に面した美しい建物の多い大学で、1851年に創立され現在6,500人の大学生と、2,400人の大学院生を有し全米にも有名な大学である。この大学の Evanston Campus には工学、音楽、天文学、生物学、地学、数学の図書館と、3,200人が一度に読書できる総合図書館があった。

工学部の図書館は Technological Institute の巨大なビルの3階と4階にあり、3階の入口を入ると天井の高い大広間になっていてたくさんの学生の熱心な勉強する姿が目飛びこんでくる。その一番奥にカウンターがあり回転式のバーを入るとそこが書庫兼閲覧室になっている。この図書館には97,000冊の本があり2,600種の定期刊行物を受け入れている。閲覧室は細長く3階建になっており、本棚の並ぶ横に机がずらっと置いてあり、書庫の中でも十分読書ができるようになっているのは非常に便利だった。本の貸出しには身分証明書(I.D.カード)が必要で、プラスチック製のそれは又コンピューターにかかる一種のパンチカードでもあった。従って本の貸出しには紙に何か書き込んだりする手間はいらず、非常に簡単であった。貸出し手続きが終ると出口の回転バーが動くよう係員がボタンを押してくれる。たとえ何も



借り出さない場合でも係員が確認してボタンを押さないかぎりそこを通れないようになっており、監理体制は厳重であった。この工学部の図書館は夜12時まで利用でき、試験前になると閉館まで多くの学生の姿が見られた。

一方、Illinois 大学はシカゴから南130マイルの広々と広がるとうもろこし畑の中の、Urbana と Champaign という2つの隣接した市にわたってそのキャンパスが広がっている。全学生数32,000人、うち大学院生8,400人で全米でも5番目くらいに大きい大学である。人口が97,000人の Community にそのように大きな大学があるため、大学が町のほとんどといった感じでもある。ここの大学の図書館は全米でも指折り、その蔵書数は440万冊以上にものぼるそうである。大学のほぼ中央に Main library がありその他に工学、化学、物理、数学など18の学部が独自の図書館をもち、さらに4年生までの学生用の図書館もあった。

Main library には歴史学、哲学、古典、商業、英文学など主に人文科学系の学部の本が中心に収められているが、それ以外に館内には News pa-

per と Far eastern library がある。News paper library には世界各国の主な新聞がととのっており、日本からは「朝日」と「日経」が約1月遅れで届いていた。ここの library は研究用資料としての利用もさる事ながら、世界各国からの留学生にとっては母国からのニュースに接する憩いの場所でもあった。Far eastern library には日本、韓国、中国の3ヶ国の図書が豊富に収められてあった。日本のものでは各種年鑑や白書それに「中央公論」「文芸春秋」などの月刊誌や「朝日ジャーナル」等数種の週刊誌もあり、東洋文化を研究している学生によく利用されていた。

私が学習や研究に主に利用した図書館は、Engineering Hall の中にある工学部の図書館でそれ以外に物理、化学、数学の図書館にも時折足を運んだ。それらの図書館で気づく事は、アメリカの学生は図書館を実によく利用するという事であった。これはまずアメリカの大学教育が非常に活発で宿題が頻繁に出され、さらに学生が独自に勉強し、自分の納得のいくまで理解する事が要求され、自分が興味を持った分野にどんどん深く立ち入っていく事が期待されている事にその原因があるようだ。学生として授業に出ると、まず初めに教科書と参考書の紹介があり、たいていの学生は近くの本屋で教科書を買って求めるが、本の値段

の高いアメリカでは参考書を買う学生はほとんど見あたらない。そこで参考書類は図書館を利用するという事になるわけだが、できるだけ多くの学生に利用できるように Reserved Books という制度がある。これは参考書として指定された本の貸出しを禁止し、図書館の閲覧室でのみ読めるようにするもので、この事が図書館で勉強する学生が多いもう一つの原因にもなっている。

ところで理工系の図書館を利用して気づく事は、日本で出されている欧文雑誌はほぼあらゆる分野でそろえられている事である。しかしながらこれはある意味で当然な事であるかもしれないが、ドイツ語やロシア語の雑誌が数多くあるのに対して、日本語で書かれた雑誌はほとんどその姿が見られないというのが実情である。

Illinois 大学の図書館の本の貸出しには、身分証明書と図書館利用の為のカードが必要で、又貸出しカードに一つ一つ書きこむなど全体的に旧式のものであった。しかし私がいる間にも少しずつ改良され、コンピューターの導入の為身分証明書がコンピューター読みとり可能カードに改められ、又一部の図書館では、本の番号を自動的に読みとる装置も導入されて新しい波が来ている事は明らかであった。

(工学部助手)

図書室めぐり

農 学 部 図 書 室

1. 図書室の機能

図書館機能は学部主題分野についての研究図書館機能と共に、学部学生、大学院生のための学習図書館機能を兼ね備えているが、学部がもつ性格として研究に重点をおく、むしろ研究図書館としての機能に中心をおいている。

2. 図書、雑誌等図書館資料の集中化

研究領域の限らない拡大と同時に、研究は学際

的傾向にあり、また一方ではより細分された主題への専門化が進みつつある。このため図書館資料の充実や、参考業務の内容が多岐多様化することになり、図書館としてこれに対処しなければならない。とすれば農学部図書室は、従来のように1つの中央図書室と複数の教室図書室等で構成され、また資料がそれぞれに分散配置されている状態では、研究者等図書館利用者に不便であるばかりで



なく、研究に支障を来たすことは明らかである。

そのため積極的な顕在的利用者の要求はもち論、潜在的利用者の要求がどこにあるのかを含め、これらの要求に対処しうる図書館を求めて、昭和39年図書委員会が設けられると同時に、図書館資料を充実することと併行して、分散している雑誌を中央図書室に集中することが検討されてきた。昭和50年に中央図書室が現在の場所に移転されたのを契機に、この基本線に沿って資料の集中化が軌道にのりはじめ、現在に至っている。

3. 図書館資料の集中による図書館活動

参考業務は図書館活動の1つとして従来から行ってきたが、資料不足、二次資料の未整備等のため、担当者の熱意にもかかわらず必ずしも十分要求に応じられていなかった。しかし、図書館資料の集中化に伴い専門分野の中心的な雑誌や周辺領域の雑誌、資料が中央図書室に集中され、また不備であった二次資料も順次整備されてきた。

この集中による資料の充実によって、研究図書

館としての参考業務、整理業務も質的な転換を迎えようとしている。たとえばその1例として参考業務の内容と依頼件数をみると、所在調査が従来参考業務の大半を占めていたのに対して、二次資料の整備が進むにつれて事項調査が増加し、国内外の必要情報を提供することが可能になった。これを数字でみると、件数は昭和49年では約1,900件であったのに対して、昭和51年では倍近い約3,700件となり、今後増加することが予想される。

また依頼者は学部教官、学部学生、大学院生が大半を占めているのが当然であるが、これに加えて他学部、他大学、機関の研究者からの調査依頼が含まれ、これもまた年々増加の傾向にある。

参考業務の件数の増加と共に、複写による資料の取り寄せの要求があり、国内資料はもち論、BLLDやNAL(National Agricultural Library)等国外の機関よりの資料の取り寄せを行っている。

資料の集中化によって整理業務においても内容の転換を進めつつある。資料の集中は利用者の増加を捉し、要求内容は多様化している。そのためこれに応ずるには資料の充実を計る必要がある。一般的に閲覧と整理は切り離して論ずることができないのであるが、中央図書室としての必要資料は独り整理で選定されるのではなく、利用者の要求をきく閲覧との密接な関係があってはじめて適切な蔵書構成ができるのである。このため整理では閲覧を通じた利用者の必要資料をできるだけ整備するようにしている。

農学部図書掛長 辻 武夫

告 知 板

BLLD の文献複写サービスについて

BLLD というのは、英国国立図書館 (British Library) 貸出部門 (Lending Division) のことであり、世界の学術雑誌を網羅的に収書して国内、

国外の図書館等に対して、幅広いサービス活動を展開しています。

BLLD は世界各国から47,500タイトルの出版物

を受取っており、逐次刊行物の所蔵総数は12万タイトル。更に参考部門 (Reference Division) が所有する20万タイトルの逐次刊行物と、英国内の主要図書館のコレクションが利用できます。なお蔵書400万のうち、150万の研究レポート、約7万の国際会議の議事録、各国政府、国際機関刊行物のコレクションがあります。

このたび文部省と BLLD 及びブリティッシュ・カウンシルが協議の結果、クーポン券による**文献複写サービス**を受けることができるようになりました。クーポン券は附属図書館の経理掛が四半期毎に、部局からの希望に応じて購入し、配布します。

複写の申込みは、それぞれ所属の部局図書室でできますが、現在のところ校費に限られています。

代金は、クーポン券1冊(20枚綴り)が16,500円で、1枚で複写できるものは下記のとおりです。

- a) ゼロックスコピー 10ページまで
- b) 引伸したマイクロフィッシュ 10ページまで
- c) 35 mm マイクロフィルム 20ページまで
- d) マイクロフィッシュに撮ったレポート1点

所要日数は、早ければ日英間の往復日数2週間を含めて16日ぐらいで送られてきます。その際の郵便料金はクーポンの代金に含まれています。ぜひご利用下さい。

大学図書館界の動き

国立大学附属図書館の整備充実に関する要望書について

去る6月2・3日開催された第24回国立大学図書館協議会総会において決議された文部大臣への要望事項については、その後常務理事会で下記のようにとりまとめられ、国立大学図書館協議会会長から、文部大臣はじめ大蔵省、行政管理庁事務次官ならびに人事院総裁に提出された。

記

図書館の整備充実は、大学における教育研究体制の維持発展にとって不可欠のものであります。国立大学附属図書館は、関係省庁のご配慮によって着々と改善の道を歩んで参りました。大学みずからも個々の大学における努力と本協議会の活動等を通じる協力によっていっそうの改善のための策を講じておりますが、国立大学図書館は関係各方面のご理解、ご支援によってさらに飛躍的な整備充実が推進されなければならない現状にあります。とくに図書館は図書・資料その他の情報量の増大、図書館に対する新たな機能についての要求に対応しなければならず、また日本の国立大学図書館の現状は国際的に比較した場合も所蔵図書資

料・人員・施設・機能いずれの点におきましても、きわめて不十分といわざるをえませんので、これらの問題の解決についての早急な措置が必要な状態にあります。

さしあたり、国立大学図書館の整備充実について関係省庁に早急な措置を要請すべき点を掲記すると以下のとおりであります。

1. 図書館予算について

- (1) 「学生用図書購入費」をさらに増額すること
- (2) 「特別図書購入費」をさらに増額すること
- (3) 「外国雑誌購入費」をさらに増額すること
- (4) 「参考図書購入費」をさらに増額すること
- (5) 「共同利用図書購入費」を新設すること
- (6) 「図書館維持費」を増額すること
- (7) 夜間開館・休日開館に必要な経費を増額すること
- (8) 図書館職員の研修旅費を増額すること
- (9) 冷房設備を設置し、その維持費を予算化すること

2. 図書館職員について

- (1) 図書館職員の大幅増員をはかること
 - (ア) 学生増および学部・学科、研究所等の新増設が行われる場合には学生・教官の増加に対して一定比率をもって図書館職員の定員を増員するように措置すること
 - (イ) 参考業務担当職員の増員をさらに推進すること

- (ウ) 相互協力業務担当職員の確保・増員をはかること
- (エ) 夜間・休日開館に必要な定員増をはかること
とくに夜間学部を置く大学については、その教官・学生数に見合った図書館職員の定員を増加配分すること
- (2) 図書館長、分館長の待遇改善をはかること
- (3) 事務部長、課長、事務長の管理職手当の増額をは

かること

- (4) 課長補佐・事務長補佐・分館事務長の新設・増員をはかること
 - (5) 図書館職員の等級別定数のわくを拡大すること
3. 大学図書館関係諸基準の改訂とそれを裏づける措置をとること
(各事項についての説明は省略)

職員研修

研修会・講習会等について

昭和52年度に実施されたもの、及び実施予定のものは次のとおりです。

(実施分)

1. 近畿地区国公立大学図書館協議会図書館施設に関する研究集会

期日 昭和52年4月27日(水)

場所 大阪女子大学

近畿地区国公立大学図書館職員47名が参加し、昭和51年5月31日に竣工した同大学図書館を見学、その後熱心な質疑応答が行なわれた。

2. 昭和52年度漢籍担当職員講習会

期日 昭和52年6月27日(月)～7月2日(土)

場所 京都大学(人文科学研究所附属)東洋学文献センター

目的 この講習会は大学図書館や公共図書館などにおいて漢籍の整理等の業務に従事する図書館職員に、漢籍の取扱いに関する基礎的な知識と技術を拾得させる。

3. 昭和52年度大学図書館職員長期研修

期日 昭和52年8月8日(月)～9月3日(土)

場所 図書館短期大学他

目的 大学における教育・研究活動の急速な進展に伴い、大学図書館が図書資料及び学術情報を、利用者に迅速かつ的確に提供することの重要性がますます高まっている。このため、大学図書館は、利用者の高度な要

求に即応した図書資料及び情報提供体制を整備する必要がある、その一環として、図書館業務の合理化・機械化によるサービス向上と、情報提供等のサービスの質的改善を図らねばならない。これらに必要な最新の知識及び技術を、相当の経験を有する図書館職員に習得させる。

4. 昭和52年度図書館等職員著作権実務講習会

期日 昭和52年8月24日(水)～8月26日(金)

場所 京都大学薬学部記念講堂

目的 図書館等に勤務する職員に対しその実務に必要な著作権に関する知識を修得させる。

5. 第23回近世史料取扱講習会

期日 昭和52年9月26日(月)～9月30日(金)

場所 京都府立総合資料館

趣旨 公共機関などにおいて、近世史料を取扱う事例の増大にともない、当該関係者に近世史料の概要、読解、調査、収集、整理、分類、保存管理などに関する基礎的な知識技能を取得させる。

(実施予定分)

昭和52年度東京大学図書館情報学セミナー

期日 昭和52年10月3日～昭和53年1月28日

場所 東京大学附属図書館

目的 大学図書館職員に対して、図書館情報学に関する高度の知識を習得させる。

昭和51年度京都大学蔵書統計

(昭和52年3月末)

部局別	種別	増加数			累計		
		和書冊	洋書冊	合計冊	和書冊	洋書冊	合計冊
図書	館	7,914	1,839	9,753	342,197	140,244	482,441
文学部	部	4,038	3,755	7,793	355,916	206,172	562,088
教育学部	部	1,537	1,014	2,551	32,014	29,945	61,959
法学部	部	3,577	3,406	6,983	168,429	224,984	393,413
経済学部	部	1,790	1,053	2,843	141,633	152,074	293,707
理学部	部	1,116	3,054	4,170	32,504	157,434	189,938
医学部	部	473	1,633	2,106	28,441	76,239	104,680
病院	院	89	66	155	11,074	21,135	32,209
薬学部	部	95	522	617	7,170	13,103	20,274
工学部	部	3,564	6,555	10,119	97,304	175,208	272,512
農学部	部	2,442	1,750	4,192	132,779	118,425	251,204
農場	場	0	2	2	1,008	103	1,111
演習林	林	302	118	420	5,938	2,359	8,297
教養部	部	8,403	6,771	15,174	178,490	137,433	315,923
化学研究所	所	163	726	889	6,314	20,622	26,936
人文科学研究所	所	9,028	1,589	10,617	286,630	34,274	320,904
結核研究所	所	8	26	34	1,150	2,081	3,231
原子エネルギー研究所	所	112	369	481	3,057	6,343	9,400
木材研究所	所	91	131	222	3,816	3,563	7,379
食糧科学研究所	所	186	312	498	2,759	5,334	8,093
防災研究所	所	219	459	678	5,310	9,868	15,178
ウィルス研究所	所	16	219	235	247	3,416	3,663
経済研究所	所	1,080	909	1,989	19,498	11,797	31,295
基礎物理学研究所	所	47	745	792	2,245	18,788	21,033
数理解析研究所	所	162	2,001	2,163	3,016	39,152	42,168
原子炉実験所	所	818	708	1,526	8,905	15,434	24,339
霊長類研究所	所	162	376	538	1,624	3,054	4,678
東南アジア研究センター	センター	850	1,401	2,251	3,809	11,542	15,351
大型計算機センター	センター	14	233	247	279	1,918	2,197
ヘリオトロン核融合研究センター	センター	0	61	61	2	67	69
医技短大	大	290	16	306	2,317	117	2,434
本部	部	10	15	25	4,927	507	5,434
合計		48,596	41,834	90,430	1,890,803	1,642,735	3,533,538

○本部：庶務・経理・施設・学生各部および保健診療所・保健管理センターを含む

○供用換・管理換による増減の集計数 増：981冊，減3,322冊（増加数の外数）

あとがき：本「静脩」の発行要項は，商議会で承認（発行目的については創刊号で述べられた趣旨にそうこうとて承認）されたのち昭和52年4月1日付館長裁定により編集内容，編集組織（静脩委員会・静脩編集委員会及び静脩部局連絡員）が制定され4月以降これらの新体制により静脩を発行している。

編集組織中，静脩編集委員会委員は次のとおりである。

委員長 須ノ内事務部長，委員長代理 渡邊総務課長，委員：倉橋整理課長，武内受入掛長，古原参考掛長（以上附属図書館），広庭文学部閲覧掛長，辻農学部図書掛長

京都大学附属図書館報「静脩」Vol. 14, No. 2（通号55号）1977年9月25日発行・編集：静脩編集委員会（責任者 附属図書館事務部長）発行：京都大学附属図書館・京都市左京区吉田本町・電大代 751-2111（内線）2611～2641